見ましても、フレーベル主義に盡くして居らるゝ婦人の如何に多く、そして其の仕事の如何に大であるかといふことを知り得やうと思ひます。

私は先日小河博士にお逢ひました時、先生は「兒童保護の中心」といふ題で、兒童保護中心となるべき者は婦人であるといふことを、いろ〳〵な實例を引いて皆さん御話しやうと云つて居られましたが、今日は不幸にして、其の御講話を拜聽出來なかつたのであります、然しいづれ又機會を得て是非ともお話を伺ひ度いと思ひますが、今日の私のお話も矢張兒童保護の大切な一部門の中心としての御婦人方を考へて見たのでありました。

事實が斯うでありました。理想上の希望はいふ迄もありません。我國に於ける幼稚園教育の進步發達の爲に御婦人方の一層眞劍に力を入れて下さることをお願ひするのであります。

花と子供の興味

菅原敎造

一最近の實驗的研究

自然界に於ける樣々の現象が、如何に子供の眼に映るかといふことは頗る興味ある問題である。屢々言ふ如く、子供の心は飽くまでも子供の心であつて、吾々成人の心を以つて子供の心を忖度するといふことは誤りである。近來は斯ういふ方面の研究が、だん〳〵と盛んになつて來て、例へば雲であるとか、花であるとか、若しくは人形であるとかいふやうな事物が、どういふ意味に於いて最も多く子供の興味を惹くものであるかといふこ

とが實驗的に、飽くまでも、子供を本位として研究されて來たことは、大に喜ぶべき點であらうと思ふ。

如上の立場から、花に對する子供の興味を實驗した最近の研究ほ、千九百五年に亞米利加のカリシ、セーヤー女史(Miss. Alice Thayer)の發表したものと、其の翌年に、アンゼリカ、シーズ(Angeilca Sayz)と云ふポーランド人の發表したものとがある。そして後に出たシーズの實驗は、セーヤー女史の試みた質問を、其の儘ポーランドの子供に試みたものである、結り與へられた一の問題に就いて、二ケ國の子供を實驗したことになる故に此の二ツの結果を比較研究すれば、尠くとも次の三ツの疑問が何等かの意味に於いて攻究されて來やうと思ふ。

一、國情を異にする子供は、其の型に何等かの差違を現すか。

二、國情及び教育の相違は、子供の心理に何等の特性を及ぼすか。

三、異れる國の子供と子供との間には共通した普偏性が存在するか否。

シーズ氏は此の興味を以て、セーヤー女史と同一の質問を、ポーランドの首都ウォーソー(Warsaw)に於ける九歳より十三歳までの女兒三百九十七人に與へて、それ〳〵實驗研究を施したのである。

二　子供に記憶せらるゝ花

三百九十七人の子供が知つたゐた花の名は、全體で百三十二種、これを數の上で云へば、平均一人の子供が十一種の花を知つて居た、それ等の答案を調査するときに先づ第一に考へられる事は、年長の子供程、其の興味が發達してゐると共に、數の上にも多くなつてゐると云ふことである。即ち九歳と十歳の子供は平均九種、十一歳は十種、

十二歳は十三種、十三歳は十五種、十四歳は十七種、十五歳は十六乃至十七種といふ現象を呈してゐる。これを亞米利加の子供に比較すると、其の數に於いてはポーランドの方の稍下位に落ちるけれども、其の質に於いては兩者は殆んど一である

この中で最も多く數へられた花の名を十種だけ掲げると、薔薇、菫、矢車菊、山百合、紫羅蘭花、さんしきすみれ、百合、瑠璃草、鬱金香、水仙の順序である、これを亞米利加の子供に比較すると薔薇と菫は共に最高位を占めて居る。然し「さんしきすみれ」は亞米利加の方は第三位に居るのにポーランドの方は第七位に下つてゐる。

三　子供の好きな花

子供の撰擇に任せて、最も好きな花を指摘せしめた結果は、薔薇、山梔子、百合、紫羅蘭花、瑠璃草、さんしきすみれ、矢車菊、水仙、接骨木の順序である。さて、何故さういふ花が好きかといふ理由に就いては、何等の答へも與へない子供が多い。偶々「この花が好きですから好きです」「私を樂しますから」といふやうな如何にも子供らしい答へが多いのである。然しさういふ答へは年長になるにつれて非常に減じてゐる。これは思想や內省力の發達に伴ふ自然の結果と見るべきであらうその理由を與へない子供は、九歳より十歳までに八割を占めてゐるに、十一歳に於いて僅に二割（漸次減少し十四歳に至つて零となつてゐる）に減じてゐるといふことは、子供の精神的發達を考へる上に大に着目すべき現象であらうと思ふ。

何故此の花が好きかといふ理由に答へた子供の多くは、花の香と美（主として色彩の美）を指摘してゐる、殊に香を主たる要素としてゐる子供は八割を占めてゐる、色を其の要素とした者は多くは少くとも四五種の違つた色の花を掲げてゐる。この事實は、子供の好きな色は單に一種に止まら

ないことを明にしてゐる。而して最も多く好まれてゐる色は、白、青と薄紫、黄と赤といふ順序である。而もそれ等の花は皆、極めて華やかな、優美な色彩を持つてゐる花であつた。此の點はセーヤー女史の得た結果と一致してゐる。ポーランドの子供も亞米利加の子供と同樣に、黄色の花を好まない、然し面白いことには、野生の花に對して反つて黄を好む傾がある。殊にポーランドの子供は、極めて明瞭にこれを言ひ現してゐる。其の理とする處は、如何にもおとなしいと言ふことにある。これを以つて見れば、これ等の女兒は質朴といふことに對して強度の憧憬を持つてゐるやうに思はれる。

形の美に就いては、香や色彩の美に於けるよりも遙に少い、僅に菊であるとか、蘭であるとかいふやうな形の面白いものに限られてゐる。

其の他は自分の家なり庭園なりを飾るに都合のいいと云ふことも一の要素となつてゐる。百合や瑠璃草は主としてこれである。初春他の花に先きだつて咲くといふことが興味の中心となつてゐる場合もある。櫻草の如きはそれである。これを反對に最も晩く咲いて、他の花が凋んでしまつた後に、なほ生々としてゐるといふことが興味の中心となつてゐる場合もある、木犀草の如きはそれである、又、個人的の記念として、或る特殊の花を愛する子供もある。例へば、お父さまの墓に咲いたと云ふ理由で、「ゲンノショウコ」と云ふ花が好きですと云ふ子供も三人ある。

或る特殊の花を指さずに、漫然と花が好きですと答へた子供が全體の一割五分をなしてゐる。では、どんな花が嫌かと云ふ問に對して若干の子供は蕁麻、蒺藜、莠草が嫌であると答へ、其の他は子供によつて、それ〳〵違つてゐる、然し嫌だと云ふ理由は一般に、色彩の醜い爲めか、若しくは香

のない爲めである。この點もまた、亞米利加の子供と一致してゐる。

四　花に對する疑人

「花に靈ありや」と云ふ問に對して、八割六分强は、有りと答へ。二割一分弱は無しと答へ、殘りの少數は「花に靈があるけれども、吾々の靈とは違ふといふやうな、不定な答へである。靈なしと答へた者は年長者よりも反つて幼少な子供に多い靈ありと云ふ答へが年長者に多いといふことは如何なる原因に基いてゐるかと云へば、年長者は學校に於いて得た動物に對する知識を植物に類推したものと思はれる。

傷んだ花や、色褪めた花に對する感傷の情や、或は花の運命と、人間の運命とを對照せしめるといふやうな答へもある。就中面白いのは「花は靈を有つてゐます、秋になれば黃色くなつて、恰度自分の悲しい運命を訴へるやうに、うなだれて來ます。」と云ふ答である。又、破れた花や凋んだ花を見た時に、どんな感じがするか」といふ問に對して、十三歲の女兒は「最愛な故鄕に捨てられ、旅路で果ない最後を遂げる孤獨な少女を見るやうな感じがします」と答へ、又十四歲の女兒の答へに、凋んだ花は、恰度、全世界でも破る力を有つてゐると信じてゐた勇士が、其の實行に破れて、無念な死を遂げて行くやうな感じがします」といふやうなのがある。

「花は人間に似てゐるか」と云ふ問に對して、七割七分の子供は似てゐると答へ、一割四分は似ずと答へ、殘りの若干は「知りません」と答へてゐる。似てゐると云ふ方の子供は多く、生物學の立場から見てゐるので、花は人間のやうに食物をとり、呼吸をし、生長をするから人間と似てゐると云ふにある。一人の女兒は、花は自分自身の言語を持つてゐて、話をすることが出來ると答へ、六

人の子供は花の外形さへも人間に似てゐると答へてゐる。其の例證となつてゐる花は多く「さんしきすみれ」である。雜草の中に咲く菫は、影や卑賤な周圍に生活をしてゐる人間と似てゐると云ひ丈高く生長する鬱金香は、傲慢な人間に似てゐると云ふやうな答へもあれば、又「私は花も愛するし人も愛します、故に花と人とは似てゐます」。と云ふ面白い答へもある。それから進んで、花も人も神に造られたものですから似てゐなければなりません。」と云ふのもある。似てゐると云ふ答に理由を附せないのが三十六人ある。

「花になり度いと思ひますか」と云ふ問を百六十七人の子供に與へた處、七十八人は、花になり度いと答へ、六十人はなりたくないと答へ、殘りの二十九人はこれに答へなかつた、成り度いと云ふ方で新鮮な空氣の中に住む花の幸福を理由とするものが三人ある。茲に注意すべき點は、自由や新鮮な空氣に對する憧憬は、特に都會で生長した子供に多いといふことである。スウキトな香を持つてゐると云ふことを理由とするものが十二人、綺麗であるからと云ふのが十八人「聖母マリアが百合を愛されましたから、百合になり度い」。と云ふのが一人、「花のやうにあどけない、無邪氣なものになり度い」と云ふのが二人、花のやうに人に愛され度いと云ふのが三人、ぱらのやうに有用な者になり度い、ばらはいろ〳〵善いものに作られるから」と云ふのが一人ある、其の他極めて詩的な理由を與へた子供も若干ある。例へば「私はどんなに花になりたいと思ふでせうか曉の美しい光りは玉なす露にたゝよひ、そして私の衣を飾ります」と云ふ答へや、或は「私は子供の時によく花になつた夢を見たことを憶へてゐます。若しも花になつたら悲しいこともなくて、さぞ幸福だらうと思ひました。もしまたあの薔薇や、赤い

げんげや、瑠璃草のやうに綺麗になつて愛せられ度いと思ひました、然し終には、さういふ澤山の希望が一にまとまつてしまつて、獨り菫だけが私の眼にも理想にも殘つてゐました。」と云ふやうな答へが十五歳の女兒から得てゐる。

花になるのが嫌だといふ方の子供には、かういふ詩的性情を持つてゐる者はなかつた更り、生に對する理解が比較的進んでゐるやうに思はれる、其の中で十二人は、花は何時でも摘みとられて死んでしまうから、と云ふ事を理由とし、四人は到底不可能な事だから望まないと言ひ、他の四人は神は吾々を人間に造られたものだから花にならうと思ないと答へ、二人は花は無用なもので人間は有用なもだのからと答へてゐる、この事實は子供に於ける、生の歡びと自己保護の本能とを說明してゐる。

五　花と子供の遊戯

子供の遊戯生活に於いて、花は非常なる勢力を占め、其の遊び方も極めて多い、此の實驗によつて見るも、全體の八割一分强は遊戯に於ける花の必要を示し、これを否定せる答は僅に一割四分强に過ぎない。殘りの三分强は不明瞭な答である。此の遊戯の中心は花環や花束を造ることである。其の他の用法は子供の境遇や教育によつて、非常な差異を有つてゐるけれども、概して年長の女兒は花を蒐集してそれを干し、或はそれを寫生するといふやうなことに興味を有ち、年少の女兒は自分の頭や、人形の頭にさして、それを飾ることに興味を有つてゐる、宗教的性情を有つてゐる子供は花を以て祭壇を飾ると云ひ、藝術的な傾向を持つてゐる子供は、室内の裝飾にすると言ひ、センチメンタルな子供はまたそれ〴〵違つた方法を答へ共に自分の將來を暗示してゐる、こゝに注意すべき事は、花遊びを好む子供と、好まない子供との

間には一つの典型的な相違が介在して居るといふことである、好まないと云ふ方の子供は、自己の境遇上、自然物に接觸した經驗がないやうな子供に限られてゐる、一人の子供の答へに、嘗つて花を持つて遊んだことがないばかりでなく、花環にした花を見るのも厭である。と云ふのがある。

五　花に關する子供の迷信と昔譚

花に關する迷信、昔譚及び傳說を言ひ現した子供も尠くはない。

迷信の中で最も普通なのは、「やぶにらみ」で其の觸るれば毒せられると云はれてゐる爲めである、四瓣のげんげと五瓣の接骨木は幸福を持つて來る水ぶくれのした時に、仙人掌の汁をつければ直ぐに癒る、瑠璃草の花紛が目の中へ落ちると、世界中の寶が見える、花束の夢を見ると家族に死人があるなどがその主なるものである。

昔譚及び傳說は子供に極めて强い印象を與へてゐる、子供はそれ等の話を物語ることに興味を有ち且つ其の花の起原を說明しやうと努める、十一歲の女兒（非常に貧しいは）蒲公英の話をしてゐる、「ある處に、お父さまもお母さまもない、貧しい孤兒が居ました、彼女は深山の奧をさまよひながら、どうぞ私に死を與へて、お父さまやお母さまの處へやつて下さいといつて、神樣に御祈りをしてゐました。するとそれを御聞きになつた神樣は彼女を蒲公英の中へ入れて魂を天に誘つて行かれました。」と云ふのである。

最もよく知られてゐる迷信は、羊齒と云ふ花は年に一度、六月二十三日卽ち聖ション祭の夕に咲いて、其の花を見た者は誰れでも幸を得、寶を發見すると云はれてゐる事である。

百合は最初に、貧しい然しながら善良な孤兒の墓に咲いた花で、其の一つ〳〵の花冠には、「AVE MARIA」と書いてあると信ぜられてゐる。

山梔子は天に登つた或る少女の涙から咲いたもので、彼女は極めて愉快な樂しい天國に登つたけれども、矢張り自分のお母さまや、小屋のやうな貧しい家や、故郷の野や谷が戀しさの餘り、遂に泣き初めた。その涙から咲いたもので、涙の落ちた處は何處でも山梔子が咲くも云はれて居る。

一人の女兒（十四歳）は乳母から聞いた「さんしきすみれ」の傳說を語つて居る。ある處に仲のいい二人の兄弟がゐた。其のお母さんは惡い心の繼母でした。其の繼母にも二人の子供がゐた、繼母は嫉みの餘りに義理のある二人の兄弟を殺してしまつた。それで「さんしきすみれ」の上部にある二瓣が黑いのです。と云ふのは上部の二瓣は殺された二人の兄弟を意味し、下部の三つの花瓣は繼母と其の子供との二人を現はしてゐるのである

水仙に就いての話は「ある處に水の中に入つて空想にばかり耽つて居た人がありました。神樣はそれを罰する爲めに、其の人を花にしてしまひました。」と云ふ物語をして居るのが二人ある。

六　結論

これを要すれば。

一、花は子供の間に非常なる興味を惹かれてゐるもので而も年齡の增加や、理想や智力や審美的感覺の發達と相伴つて其の興味が擴大されて行く又、花を愛する最初の要素は其の香と色彩の美なるに基て居る。子供は斯して色彩感覺の發達を助け、次第に記憶と、聯想と、象徵との働きを進めて行く。

二、子供の多くは花の靈を認め、花の蒙つた損傷や、惡戲に對しては、同情的に是れを感傷するものである。此の心を敎育上に利用して、子供の破壞的性情を抑制し、高尙なる感情の陶冶に資することが極めて大切である。

三、「花に成り度いと思ふか。」の問に對する答案

を考察すれば、其の肯定者の理由は主として、太陽、新鮮なる空氣及び自由に對する憧憬より出て居るといふことは明かである、實際にさういふ生活をして居るといふ理由で花を羨望してゐる答すらもある。又、歩む事が出來ないといふ點で、花を憐んで居る答へもある。かういふ感情は殊に、田舍に生長して、教育の爲めに都會へ出て居る子供に多い、灰色な都會の建築や冷いスクールベンチは、子供を壓迫する事が如何に多いかを示して居る。

四、花に對する興味が發達して行くといふことは、取りも直さず、自然に對する子供の感動性を現はして居るものである、故に子供の周圍を努めて美化して置くといふことが、兒童教育家の忘れてはならぬ仕事である、休暇の間は可成、田舍に生活せしめ、野や森や、庭園に遊ばすることを忘れてはならぬ。

以上述べたシーズ氏の說は、頗る其の當を得た意見であつて、教育上大に力說せらるべき根本の問題であらうと思ふ。（完）

子供の衞生

醫學士　石塚保吉

これまでは、其の季節〳〵に從つて、子供の衞生にはどういふ注意が入るかといふことを、切れ〳〵にお話して來ましたけれども、それでは讀物としては面白いかも知れませぬが、然し眞當に子供の生理を研究して、完全な發育を助けて行くしるべとするには、ものたりぬ憾みがあらうと思は